

専大生、市民と多彩に交流

ウーロンゴン大生

国際交流協定校となったばかりのウーロンゴン大学(オーストラリア)の人文学部日本語専修生15人が、6月20日から生田キャンパスで「夏期日本語・日本事情プログラム」3週間コースを受講。専大生や川崎市民とも多彩に交流し、7月9日帰国した。



ウーロンゴンをPRするミニ発表会

ウーロンゴン市と生田キャンパスがある川崎市は姉妹都市。同大生は市内にホームステイなどで滞在しながら日本語学習に励み、小学校訪問、日本民家園の見学、鎌倉ツアー、インターナショナルフェスティバルへの参加などフィールドトリップも体験した。

7月4日には、専大生にウーロンゴン大学をPRするミニ発表会が生田キャンパスで開催され、留学を希望する学生多数が訪れ、個別質問にも応じるなど盛況だった。最終日の9日には、成果発表会と修了式・送別会が同市国際交流センターで開催され、3週間の日本語学習の成果を披露した。



ゆかた姿を楽しむ

◇豊富に体験◇

受講生のジェマ・ルイーダさんは「プログラムには、日本語のスキルアップにと参加しました。仏像や神社など日本の伝統的なアートに興味を持っています。3週間コースは短いと思いましたが、いろいろと体験出来て有意義でした」と充実感をもって話した。

◇日本料理店が夢◇

シンガポールからウーロンゴン大学に留学中のシャーリー・ヤンさんは「日本は2回目ですが以前は大阪に滞在しました。なんといってもホームステイで、生きた日本語を学んだことが最高の収穫です。素晴らしいホストファミリーに恵まれました。将来は国に帰り、日本料理店を始めるのが夢」と笑顔で語った。



「夏期日本語・日本事情プログラム」は7週間コースが同時に行われ、米国のオレゴン大学、韓国の檀国大学(いずれも国際交流協定校)などから短期留学生37人が受講している。

サブゼミで留学生と交流

魚田ゼミ

キャンパスにはたくさんの留学生がいるのに、日本人との交流はあまり行われていない。そんな隔たりを埋めたいと、魚田ゼミナールの3年次生14人は「留学生との共生」を前期サブゼミのテーマにして、日本語を学ぶ留学生との国際交流を進めてきた。

対象は、4月、春期日本語・日本事情プログラム受講4週間コースのカルガリー大学生(カナダ、26人)と、6・7月、夏期同プログラム3週間コースで来日したウーロンゴン大学などの短期留学生(52人)。それぞれの文化を語り合うディスカッション、単語当てゲーム、料理大会を展開したほか、留学生が滞在する国際研修館にも積極的に訪問してコミュニケーションを深めた。



カルガリー大生と交流(左手前が糠さん。その後ろが永田さん)

きっかけは、糠(ぬか)美知代ゼミ長の提案だった。糠さんは1年前米国に短期留学中、慣れない異国での生活を現地学生が親切にバックアップしてくれた印象が強く残り、帰国後「留学生の役に立ちたい」と、国際研修館のレジデント・アシスタントとして、同会館に滞在する留学生の生活面のサポートをしている。

「一般学生の留学生に対する認識を高めたいと思いました」。ゼミ生のほとんどが同研修館に一度も訪ねたことがなく、最初は「留学生と何をどう話していいのかわからない」状態だったが、しだいに打ち解け合い、キャンパスでも自然に挨拶出来るようになった。ゼミ生たちはそろって「留学生との交流がこんなに楽しい、有意義なことだったのか」とイベントにも積極的に参加し、カンパセーションパートナーを務める学生もいる。

同じく米国に短期留学の経験がある永田理子副ゼミ長は「研修館に足を運ぶ回数が増えました。日本をよく勉強している留学生から日本の文化を教わることもあります」。糠さんは「異文化を理解する大切さを知る絶好の機会となったのでは。ささやかな国際親善ですが、『最初の一步』としたかった」と話す。

ゼミ生の活動を見て魚田勝臣教授は「留学生とのさまざまな交流で、幅広い考え方を身につけ、グローバルも重要だが、まず自国を知ることが先決という認識を持てたら、勉学にもいい影響が出ることでしょ」と話している。

商学部・古川さんに学部長賞

「西安寸劇事件」での積極的な活動を評価

2003年(平15)10月に中国・西北大学で起きた抗議活動、いわゆる「西安寸劇事件」で、日本人留学生のまとめ役となって安全確保に努めた、古川貴倫さん(商4)に、6月14日、大西勝明商学部長から学部長賞が授与された。

小学生の頃に読んだ三国志をきっかけに中国に惹かれ、歴史だけでなく経済や文化など、さまざまな分野に興味を持つようになった。専大入学後は迷うことなく第2外国語で中国語を選択。国際交流センターの春期留学プログラム・夏期留学プログラムで力を付けた後、03年長期交換留学生として西北大学へ。「前期はSARSの影響で授業が縮小され、当初の目標通りの成果は得られませんでした。騒動の際に韓国人のルームメイトが私を守ってくれたことや日本大使館との折衝など、普通の留学生活では得られない貴重な体験をしました」「専大では海外留学のさまざまなルートが開かれていますので、気軽にチャレンジしてほしい。とにかく行動あるのみですよ」と後輩にエールを送る。中国と取引のある機械関連の商社に内定し、残りの大学生活を満喫中。野呂進教授の教養ゼミでフルマラソンを経験していて、「留学生仲間と10月に北京国際マラソンにチャレンジします」とニコリ。



事件のようを伝えた「ニュース専修」

バルセロナ大学教員を講師に国際交流講演会

国際交流協定校のバルセロナ大学教員による国際交流特別講演会が6月13日、生田キャンパスで開催され、学生31人が傾聴した。「世界システムとグローバル・セキュリティ:EUの視点」をテーマにし、講師はペラ・ピラノバ・トリアス法学部教授。講演は英語で行われ、佐島直子経済学部助教授が通訳を行った。欧州連合(EU)憲法の是非を問う仏、オランダの国民投票でいずれも否決された結果を例に、EU統合の理念、安全保障、対米政策など各国の見解の違いや国民の関心度をあげ、統合が「同床異夢」の状態にある欧州の姿や今後の展望を探った。



講演するトリアス教授

15日にも社会科学研究所主催による同様の講演会(スペイン語、狐崎知己教授通訳)が開かれた。

来場者多数、留学フェア

7月8日、生田キャンパスで海外留学フェアが催され、136人が来場。米、英、豪への私費留学説明会や本学留学プログラム(長期交換、中期)参加学生の体験談、個別相談などが行われた=写真。



イギリスの都市計画について

「やさしい英語による経済学講座」

国際交流特別講演「やさしい英語による経済学講座」が6月4日から5回シリーズで行われた。講師はレディング大学(イギリス)のデビッド・フット地理学科教授(専修大学経済学部客員教授)、テーマはイギリスの都市計画に関わる問題について。



来場者は毎回60人以上で、最終日の7月9日は72人が聴講し、会場は満席。講演後は熱心な質疑応答が続いた。

なお次回は、11月、ワイカト大学(ニュージーランド)のスチーブン・リム教授を講師に迎えて開催される予定。